

## 現代の家族に関する社会学的検討

熊谷伸子\*, 荻村昭典\*

Sociological Status of Present Family and Mother-Daughter Relationship

Shinko Kumagai Akinori Ogimura

### Abstract

A present family is characterized by the concept of a social science, especially of a modern family. The modern family consisting of a father with a job, a mother with housework and children loved by their parents was established about 200 years ago in Europe and about 80 years ago in Japan. It was spread widely after World war II in Japan. Although it has been modified in some aspect these years, the essential nature of the modern family has been kept as the concept of a present family.

A very intimacy is the trait of the relation between mother and daughter in a current Japanese society. This is one of new family characteristics at the present time.

(キーワード 家族 : family, 近代家族 : modern family, 母親 : mother, 娘 : daughter)

### 1. 緒言

文部省統計数理研究所により5年ごとに行われている国民性調査の現時点における最新結果である1993年の結果<sup>1)</sup>によると、「家族が一番大切」であると、日本人の42%が考えていることが明らかになった。10年前にはこうした考えを持つ人々は、この半分の20%にも達していない<sup>2)</sup>のだから、ここ数年の「家族」に対する認識の高まりは驚異的と言える。さらに、「仕事」や「国家」への意識は低くなり、「家族」と「子ども」で過半数を超えてしまうという結果も注目に値する。まさに現在は家族の時代である<sup>3)</sup>と指摘されるように、人々の関心は家族へ向きつつあると言い得る。このような変化の中で1994年には国際家族年を迎えた。この国際家族年が、ますます人々の家族を重視しようとする感情の流れを象徴するかに見える。例えば、お受験と称される私立、国立の幼稚園や小

学校の入学受験戦争や、RV車あるいはキャンピングカー等の車による家族の行楽がもてはやされ「家族」を核とした行動が、目立っているのが昨今の社会現象である。もちろんこのような動きは人々の着装行動にも多大な影響を与えていると思われる。その一例として、近頃顕著に見られる母親と娘と一緒に購買行動を起こすという母娘消費<sup>4)</sup>などが挙げられる。ファッション行動にも家族を中心として行われる傾向が確実に出現しはじめています。

このような家族の現状と、その歴史的位置付けを含めた社会学的背景を本論文は論考するものである。

### 2. 家族の社会学的背景

#### 2-1 家族

家族に対する関心が寄せられつつある一方で、「家族は消滅の危機に瀕しているという危機感が現在の地球上の多くで論じられていることは事実である」<sup>4)</sup>と原ひろ子が述べているように現況の家族は危機的状況であるという認識が一

\* 文化女子大学大学院家政学研究所

般化<sup>5)</sup>しているのもまた現実である。なぜこのように家族に対する危機説が氾濫しているのだろうか。

「自明のこのようにで家族とは一体何なのか」<sup>6)</sup>と河合隼雄が指摘するように、家族とは定義することが難しい。マードックによると<sup>7)</sup>家族とは、居住の空間、経済的な協働、生殖によって特徴づけられる集団であるという。それは両性からなる大人と、一人またはそれ以上の子供を含んでいるとし、家族の基本形態は核家族だとしている。また、レヴィ=ストロースは次のように定義している<sup>8)</sup>。家族は結婚によって発生し、夫と妻とその婚姻によって生まれた子ども達によって構成される。家族構成員は法的、経済的、宗教的、およびその他の権利義務や性的な権利と禁忌、愛情、尊敬、畏れ等の多種多様な感情によって結び付いている。

この二人は文化人類学者であるが、社会学においては、デュルケームやパーソンズ、経済学においてはエンゲルス等と実に様々な分野の人々が家族の定義を試みている<sup>9)</sup>。日本においては、戸田貞三<sup>10)</sup>が家族とは夫婦および親子関係にある者を中心とする比較的少数の近親者が感情的に緊密に融合する共産的協同であると指摘し、成員相互の内的融合による人格の合一化を家族的結合の特質であるとしている。また、中根千枝<sup>11)</sup>は家族とは最小の、そして第1義的な社会集団で人類のあらゆる社会にみられる普遍的な制度であるとしている。このように、家族の定義は実に様々であり、簡明なものではない。それは一方では家族の本質的重要性をあらわしているとも言い得る。落合恵美子は、この家族の定義の困難さをふまえた上で、この危機に直面しているとも言える現状を次のように説明している<sup>12)</sup>。家族が何かは明言できないにもかかわらず、あらゆる人間社会に存在し、常に社会を支える基礎として不可欠の役割を担ってきた。それゆえに、家族崩壊を思わせる兆候はほんのわずかであっても人々を震撼させるのである。すなわち、我々が家族であると漠然と思ひ浮かべる家族像自体を明らかにしない限り危機感か

ら解放されないと考えられ得るのである。

## 2-2 近代家族

現在、我々が家族とは何か、家族とはどうあるべきかという問いに対して考える家族とは、一見普遍的なものにみえて、実は極めて歴史的な産物である<sup>13)</sup>。そのことを最初に明らかにしたのは、フランスの歴史社会学者フィリップ・アリエスである<sup>14)</sup>。アリエスは「〈子供〉の誕生」において、我々が自明なものと考えている「子ども時代」が実は一七世紀末以降に成立したものであることを明らかにした。すなわち、子どもは純真無垢な存在として愛情を注がなければならないとする考え方自体が、近代の産物だったのである。これには、学校が成立したことにより学齢期の子ども達が、大人達と共に労働を行わなくなったことが大きく関与している<sup>15)</sup>。この子どもの存在の変化に際し、その親達も変化を遂げなくてはならなかった。このことについて、落合恵美子<sup>16)</sup>は「小さく不完全な大人にすぎなかった存在が、無垢という独自の価値をもち愛情溢れた世話と教育を必要とする子どもに変身すると裏腹に、大人の側もまた新たな内容をもつ母と父に変身を遂げなければならなかった。新たな内容とは一言でいって子ども中心主義である」と指摘している。したがって、愛情的に結合している父と母と子という関係は、いかに心安らぐ人間本来の理想と映ろうともその歴史は、わずか200年以内外しか持っていないのである<sup>17)</sup>。つまり、他の領域から明確に隔離され、情愛で深く結ばれた夫婦と子どもからなり、夫は家庭の外で職業をもち、妻は家庭内で家事、育児に専念するというような近代家族が成立したのは、産業社会の発展・確立とおおよそ並行してのことであった<sup>18)</sup>。この近代家族における特徴を列挙すると以下のようになる<sup>19), 20)</sup>。

- ①家内領域と公共領域の分離
- ②家族構成員の強い情緒的関係
- ③子ども中心主義
- ④男は公共領域・女は家内領域という性別分業
- ⑤家族の集団性の強化

⑥社交の衰退とプライバシーの成立

⑦非親族の排除

⑧核家族

すなわち、①は近代市場の成立と共に、市場に参加する個人を供給する装置として位置付けられるようになったことを意味する。②は家族愛が特権的に優先され、家族成員が強い情緒的絆で結合していることを示している。③は子どもの社会化が家族の最も基本的な機能であることを表しており、④は性別により家族成員は異なる役割を持つことを意味している。⑤は開かれたネットワークであることよりも集団としてのまとまりを強めることを意味しており、⑥は家族が公共領域から引きこもることを示している<sup>21)</sup>。さらに、⑦は家族は親族から構成され、非血縁者を排除するというものである。⑧については、日本など拡大家族を作る社会について論じる場合は注意しなければならないが、祖父母と同居していても質的には近代家族であると考えられ得る<sup>22)</sup>。これらの特性要因を取りまとめたものが図1である。

ところで、落合恵美子はアメリカと日本における代表的な家族社会学の教科書から家族についての基本的な仮説をもとに比較を行い、近代家族の特徴とそのほとんどが重なっていることを見出している<sup>23)</sup>。ではなぜ、近代家族の定義というのは、現在の家族の定義とほぼ重なっているにも関わらず、あえて近代家族と称される

のか。つまり、歴史的観点に立脚すると、こうした家族は普遍的ではなく、それどころか、ある時代に現出した歴史的現象にすぎないことが明らかになるのである<sup>24)</sup>。これこそが家族だと思っていた家族像は、実は歴史的存在に固有する特徴にすぎなかったのである<sup>25)</sup>。それにも関わらず近代家族の特性を普遍的本質と思いでしまったのである<sup>26)</sup>。これが家族崩壊の危機感が生じる原因の一端をなしている。それは、落合恵美子が近代家族を普遍であるとしたことにより、遅かれ早かれ限界に突き当たると指摘している<sup>24)</sup> ことから首肯される。

また、18世紀後半から19世紀にかけて成立した近代家族は、19世紀と20世紀においては次のような変化<sup>26)</sup>がみられた。19世紀の近代家族とは中産階級のものであった。労働者階級においては、愛情によって結ばれ、子どもは子どもらしくという家族はまだ成立してはいなかった。その後、徐々に中産階級による啓蒙と労働者側の上昇志向もあって20世紀に近代家族の大衆化がなされたのである。

一方、日本においてはこのような近代家族が成立したのは以下の理由から大正時代であると考えられている<sup>27, 28)</sup>。その主な理由の一つとして、東京などの大都市に夫の収入のみで暮らせる専業主婦が出現したことが挙げられる。また、18世紀のヨーロッパと同様に子どもを乳母等に任せず、自分の手で育てるのが良いというイ

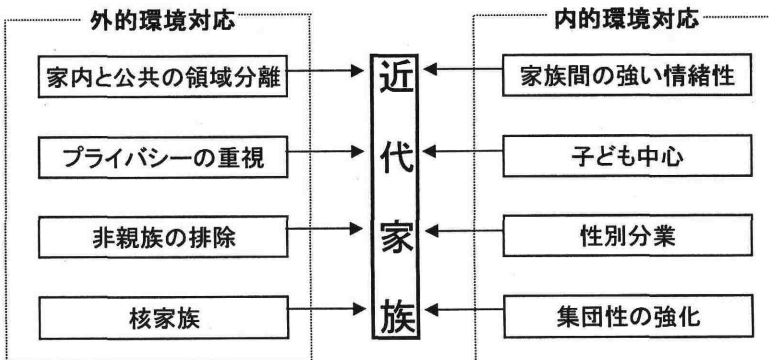


図1 近代家族の特性要因

デオロギーが出現したこともその一つである。当時の裕福な農家や商家では、奉公人や乳母に育児や家事を任せることが普通だったので、山田昌弘が指摘するように、このような子育ては画期的な考え方であった<sup>27)</sup>と言い得る。しかし、ヨーロッパ社会と同様に、初めは都市の中産階級だけがこのような近代家族を形づくっていた<sup>27)</sup>。市場と家事労働が分離し、子どもへの愛情に価値を見出すという近代家族が大衆化したのは第二次世界大戦後であるにすぎない<sup>28, 30)</sup>。日本の近代家族はごく浅い歴史しか持っていないのである。

### 3. 家族の現状

#### 3-1 家族の様相

大衆社会、消費社会、あるいは情報社会などとも呼ばれ<sup>31)</sup> 幅広い様相を呈しているのが現代社会である。このような社会環境において、人々はどのように家族を捉え、親子関係を営んでいるのであろうか。

パーソンズによれば、家庭と社会とを関係付けるという道具的役割を果たすのが父親であり、家庭内部の関係を保つという表出的な役割を果たすのが母親である<sup>32)</sup>という。今日では、父親のみならず母親も外に仕事を持って働く家庭が増え、父母ともに社会と直接関わりを持つことが多くなった<sup>33)</sup>。このような状況下で若者たちはどのような家庭を理想としているのだろうか。

青年を対象とする理想の家庭について行った調査結果<sup>34)</sup>によると、父は仕事、母は家庭という内外分担論が有意に減少し、父親も母親もそれぞれに仕事や興味を持つという各自自立論が有意に増大しているという。また、結婚後の女性の職業についても、結婚後は家庭に入るべきであるとする意見が減少し、子どもが生まれても職業を持ちつづけたほうが良いとする考えが明確に増大しているという報告がなされている<sup>35)</sup>。これらは、近代家族の特徴の一つであった、男は公共領域・女は家内領域という性別分業に反する動きである。

一方、女性達はどのように捉え、生活しているのだろうか。平成9年の「男女共同参画社会に関する世論調査」<sup>36)</sup>によると「なんといっても女の幸せは結婚にあるのだから結婚したほうがよい」に対して賛成した女性は約7割である。前回の平成4年の調査結果<sup>37)</sup>に比べると約1割減少している。しかし、「結婚は個人の自由であるから、人は結婚しなくてもどちらでもよい」に対する平成9年の調査結果<sup>38)</sup>においては、前回の平成4年の結果<sup>39)</sup>よりも約1割程賛成の割合が増加し、7割強の人が賛成している。これらのことから、女性達は結婚や家を世間体といった問題としてではなく、個人の問題<sup>40)</sup>としてとらえつつある姿をうかがうことができる。また、このような意識の反映が、未婚率の増加や事実婚の増加につながっている<sup>41)</sup>と考えられ得る。

図2は、労働力調査年報<sup>42, 43, 44)</sup>により、著者が書き起こしたものである。類似の図版が平成10年度厚生白書<sup>45)</sup>にあるが、これより3年間年次が新しく、1997年基準のものである。この図に示した実際の就労状況である同時出生集団別労働力人口比率をみると、近代家族の特質ともいべきM字型労働力率パターンが描かれている。未婚のときは多くの女性が働き、結婚退職や出産退職で家庭に入り、その後、子どもの手が離れるとまた働き出している。1948～1952年生れまでは、このM字型労働力率パターンの底は年々深くなっていく傾向がみられていた。落合恵美子の指摘する女性の主婦化<sup>46)</sup>である。しかし、図中にみられるように1953～1957年以降はM字型労働力率パターンの底が浅くなり、労働力率全体では上昇の傾向がみられる。大橋照枝は次の2点をこのような現象の主な理由<sup>47)</sup>として挙げている。第1に、晩婚化とDINKS (Double Income No Kids) 夫婦の増大などによる出産率の低下である。第2は、結婚退職制度が法律違反ということになり、結婚でやめる率が激減したことである。さらに、育児休業法が徹底されればM字の底はさらに浅くなる傾向になるはずであるとの予想も行っている。これは社会的サポートを徹底し

たことにより1978年に1.6まで下がった合計特殊出生率が1989年には2.0まで回復したスウェーデンの事例<sup>48)</sup>からも裏付けされるものである。

意識面においては男性、女性共に、家族や結婚に対する意識改革が起きつつある状況がある。図3に示す「男女共同参画に関する意識調査」の結果<sup>49)</sup>はまさに、男女性別分業という意識が薄れつつある現状を示している。すなわち、男性、女性共に男は仕事、女は家庭という性別分業に対して賛同する者が年々減り、そうではな

いという者が年々増加する傾向がみられる。しかし、実態面においては夫の生活面の関与の低さが指摘されている<sup>50)</sup>。すなわち、夫と妻の家事分担などには今だ格差が見られ、家族に対する意識は改革されつつあっても実際は男は公共領域・女は家内領域という性別分業が今だ行われつつあると考えられ得る。

### 3-2 現状の家庭にみられる母娘関係

「母親は単なるコのおヤとしての意味を超えた存在、ないしは価値的なシンボルとしての機能を果たしているようだ」<sup>51)</sup>とされるように、

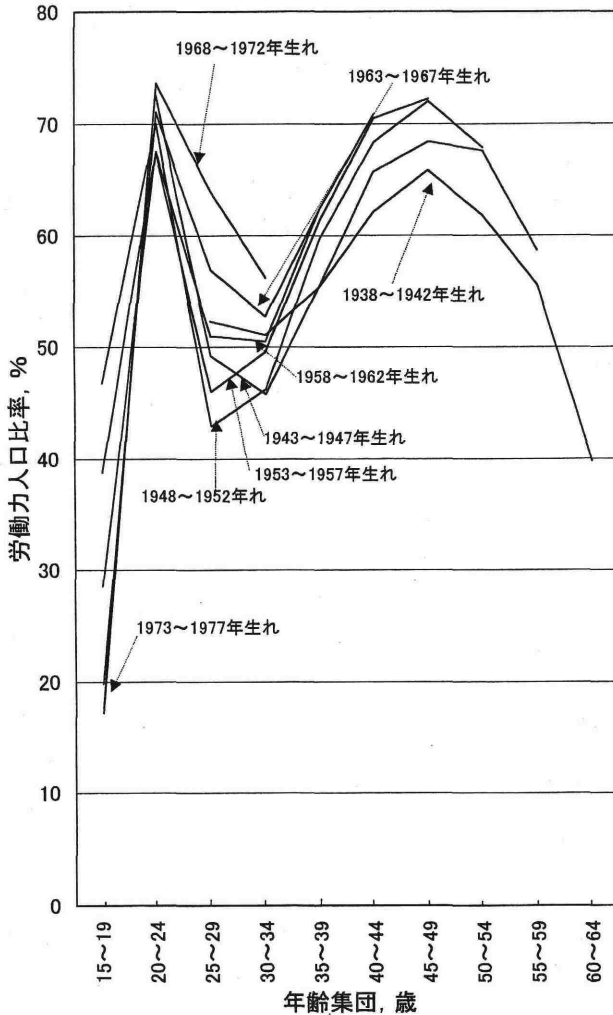


図2 同時出生集団における女子労働力人口比率

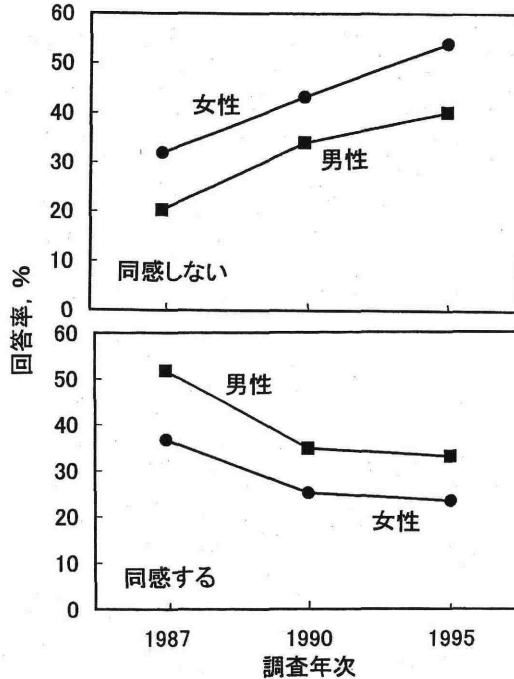


図3 総理府男女共同参画に関する意識調査における「男は仕事、女は家庭」という考え方に対する肯定「同意する方」および否定「同意しない方」の年次別の推移

母親は子どもにとって大きな意味合いを有している。また、母子関係は家族集団内の父母関係、父子関係、兄弟関係などと複雑に絡みあっており、子どもが成長するにつれて、それらの複雑な家族内の人間関係に引き込まれていく中で、人間行動の諸傾向をつくっていく<sup>52)</sup>とされている。このように母親が重要視されるのは、生まれてきた子どもが最初につくる人間関係である<sup>53)</sup>からだ。そしてこの母子関係は、その後につくられる人間関係のモデルになるため<sup>54)</sup>である。すなわち、母子関係が信頼に満ち、愛情あふれる、あたたかいものであれば、子どもは母親以外の人との間に母子関係と似た適切な人間関係をつくっていくことができ、逆に、母子関係が不安定で、敵意や憎しみが隠されていると子どもは他人との間に適切な人間関係をつくっていくことはできないのである<sup>55)</sup>。

この母子関係を取り巻く社会的環境は大きく変わりつつある<sup>54) 55)</sup>。その中でも特に、妊娠-

出産の過程がある程度親の意志によって自由に統制できるようになったことが、母子関係に大きな影響をもたらした<sup>54) 56)</sup>。本来、妊娠-出産というのは、自然の過程であり当事者の意志を超越した神秘性を伴うものであった。しかし、今日においてはもはや子どもは授かりものではなく、自らの意志でつくり出すものであるという傾向が生じている<sup>56)</sup>。すなわち、制御された出産が母親の意志において重要な要素となりつつある。その結果、図4に示す様に子どもは自分の意志にもとづいてつくったものであるから、自分の欲するようにつくりあげられるべきであるとして親の支配力が強まった<sup>54)</sup>。それは、おなかの中の赤ちゃんに話しかけたり、音楽を聴かせたりするという胎児からの子育て<sup>57)</sup>や、多数ある出産方法を検討し自らの方法で出産を実行するといった出産にまつわる諸行動などからもうかがうことができる<sup>58)</sup>。

母子一体感<sup>56)</sup>の強い一例として、一卵性母



図4 現況の親子関係における母親から捉えた子どもの位置

娘<sup>60)</sup>が挙げられる。一卵性母娘とは以前からあった言葉であるが、現在の一卵性母娘とはそのあり様が全く違っている<sup>60)</sup>。昔の一卵性母娘では、母親の生きる道としては娘の親としてだけであった<sup>61)</sup>。若くて才能のある娘は、不幸な自分の人生の唯一の彩りとなっていた。だからこそ母親は、なりふりかまわず娘に尽くし、娘の喜びは自分の喜びそのものになっていたのだ<sup>62)</sup>。しかし、現在の一卵性母娘は母娘ともに楽観的にその状況を楽しんでいる<sup>63)</sup>。まさにショッピングやおしゃべりをする女性同士の仲良し友達なのである<sup>64)</sup>。このようなこれまでに類をみない母娘の出現を、信田さよ子は戦後民主主義の中で理想とされた夫婦中心の核家族がたどり着いた現代の家族が生み出したものがアダルト・チルドレンと自覚する人たちであり、そして一卵性母娘であると指摘<sup>61)</sup>している。アダルト・チルドレンとは現在の自分の生きづらさを親との関係に起因すると認めた人であり、お母さんは素敵、お母さんといると楽しいと思っている人が一卵性母娘である定義した上で、この2つは対極に位置している<sup>61)</sup>とも述べている。

さらに、エンジェル係数という家計における育児費用の占める割合が注目を浴びているように、子どもの扱い方が変化を見せている<sup>65)</sup>。すなわち、母親が子どもに高価なブランドものの洋服を着用させるようになり、華美に着飾らせる傾向が見られるようになった<sup>66)</sup>。消費社会に住んでいる限り、人々はモノ文化を避けて通れないという状況を条件付けた上で、緒方明はこの状況を次のように説明している<sup>64)</sup>。モノ文化という現代の親子関係においては、親が子どもに対して自己愛的同一視しているのだ。換言す

るならば、母親達は子どもに対し自分の願望を投影させて満足していると考えられる。

現状における親にとっての子どもとは、しばらくの期間心理的に楽しめる耐久消費財であると指摘<sup>66)</sup>されるように、親と子どもの新たな関係が構築されつつあるのが現状であると言い得る。また、現在みられる様々な親子や母娘現象は、近代家族のその歴史的な特徴の枠を少しずつ脱している。このような社会の急速な変化に伴う家族、親子の自然な変容は、明日の社会のあり方に直結する不可避なステップであると考えられ得る<sup>66)</sup>。すなわち、近代家族の特徴を普遍的なもの、規範的なものと錯覚すると出生率の低下や共働きなどが家族崩壊につながる<sup>70)</sup>が、歴史的存在に固有する特徴の変化<sup>20)</sup>であると捉えると新しい現在の家族における親子関係が浮かび上がってくるのである。

#### 4. 総 括

我々が家族とは何か、という問いに対して考える家族の概念とは、一見普遍的なものにみえて、実は比較的近い過去に由来する歴史的な産物である。情緒的に結合している父と母と子という関係は、いかに心安らぐ人間本来の理想と映ろうともその歴史は、西欧においてもわずか200年内外しかないのである。さらに、情愛で深く結ばれた夫婦と子どもからなり、夫は家庭の外で職業をもち、妻は家庭内で家事、育児に専念することを特徴とする近代家族が成立したのは、産業社会の発展・確立とおよそ並行していた。

日本において近代家族が成立し始めたのは大

正時代である。しかし、完全に大衆化したのは第二次世界大戦後のことである。市場と家事労働が分離し、子どもへの愛情に価値を見出すには、都市の中産階級の広がりが必要とされた。

女性の就労状況を同時出生集団別労働力人口比率からみると、近代家族の特質ともいえるべきM字型労働力率パターンが描かれていた。1948～1952年生れまでは、主婦化の傾向が典型的にみられたが、1953～1957年以降はM字型労働力率パターンの底が浅くなっており、その特性にも変化がみられている。

また、1987年から1995年にかけて、性別分業の意識は薄れつつあったが、夫と妻の家事分担などには今だ格差が見られ、意識と実態の乖離が見られた。さらに、親子の関係に注目すると、現況の家族においては一卵性母娘、アダルトチルドレンといった親子関係の特徴がみられる。このように様々な親子や母娘現象は、近代家族のその歴史的な特徴の枠を少しずつ脱している。しかし、家族崩壊に直結するものではないとみられる。社会の急速な変化に伴う家族、親子の自然な変容は、明日の社会のあり方に直結する不可避なステップであると考えられるからである。

以上、本論文では現代における家族のあり様を歴史的経緯を含めて考察し、家族の社会学的位置付けを取りまとめることができた。

### 参考文献

- 1) 文部省統計数理研究所, 日本人の国民性調査, 文部省統計数理研究所, 1994
- 2) 岡堂哲雄, あたたかい家族, 講談社現代新書, 1986, 8
- 3) 伊藤忠ファッションシステム株式会社, おしゃれ消費トレンド, PHP 研究所, 1996, 178～187
- 4) 原ひろ子, 家族の文化誌, 弘文堂, 1986, 288
- 5) 望月嵩, 目黒依子, 石原邦雄, 日本の社会学 4 現代家族, 東京大学出版会, 1987, 211
- 6) 河合隼雄, 家族関係を考える, 講談社現代新書, 1980, 8

- 7) G. P. Murdock (内藤莞爾訳), 社会構造, 新泉社, 1978
- 8) C. Levi-Strauss (祖父江孝男訳), 文化人類学リーディングス, 誠信書房, 1968
- 9) 比較家族史学会, 事典家族, 弘文堂, 1996, 131～134
- 10) 戸田貞三, 家族構成, 新泉社, 1970
- 11) 中根千枝, 家族の構造, 東京大学東洋文化研究所, 1970, 3
- 12) 落合恵美子, 近代家族とフェミニズム, 勁草書房, 1989, 3
- 13) 落合恵美子, 21世紀家族へ, 有斐閣, 1994, 5
- 14) Aries, Philippe (杉山光信, 杉山恵美子訳), 〈子供〉の誕生, みすず書房, 1980
- 15) 落合恵美子, 21世紀家族へ, 有斐閣, 1994, 4～6
- 16) 落合恵美子, 近代家族とフェミニズム, 勁草書房, 1989, 4
- 17) 落合恵美子, 近代家族とフェミニズム, 勁草書房, 1989, 17～18
- 18) 落合恵美子, 近代家族とフェミニズム, 勁草書房, 1989, 301
- 19) 落合恵美子, 21世紀家族へ, 有斐閣, 1994, 94～103
- 20) 落合恵美子, 近代家族とフェミニズム, 勁草書房, 1989, 18～19
- 21) 野村一夫, 社会学感覚, 文化書房博文社, 1992, 348～352
- 22) 落合恵美子, 21世紀家族へ, 有斐閣, 1994, 100
- 23) 落合恵美子, 21世紀家族へ, 有斐閣, 1994, 100～102
- 24) 落合恵美子, 21世紀家族へ, 有斐閣, 1994, 103
- 25) 落合恵美子, 21世紀家族へ, 有斐閣, 1994, 102
- 26) 落合恵美子, 21世紀家族へ, 有斐閣, 1994, 102～103
- 27) 江原由美子, 長谷川公一, 山田昌弘, 天木志保美, 安川一, 伊藤るり, ジェンダーの社会学, 新曜社, 1989, 114～115
- 28) 落合恵美子, 21世紀家族へ, 有斐閣, 1994, 108



現代の家族に関する社会学的検討

- 29) 落合恵美子, 21世紀家族へ, 有斐閣, 1994, 108~109
- 30) 江原由美子, 長谷川公一, 山田昌弘, 天木志保美, 安川一, 伊藤るり, ジェンダーの社会学, 新曜社, 1989, 115
- 31) 荻村昭典, 現代の社会学, 酒井書店, 1989, 5
- 32) T. Parsons, R. F. Bale (橋爪貞夫訳), 核家族と子どもの社会化, 黎明書房, 1970
- 33) 大橋照枝, 未婚の社会学, NHK ブックス, 1993, 202~204
- 34) 信田さよ子, 一卵性母娘な関係, 主婦の友社, 1997, 52~53
- 35) 見田宗介, 山本泰, 佐藤健二, リーディングス日本の社会学 21, 文化と社会意識, 東京大学出版会, 1985, 91~93
- 36) 内閣総理大臣官房広報室, 男女共同参画社会に関する世論調査, 総理府, 1997, 16~17
- 37) 内閣総理大臣官房広報室, 男女平等に関する世論調査, 総理府, 1992, 37~38
- 38) 内閣総理大臣官房広報室, 男女平等に関する世論調査, 総理府, 1997, 18~19
- 39) 内閣総理大臣官房広報室, 男女共同参画社会に関する世論調査, 総理府, 1992, 41~42
- 40) 大橋照枝, 未婚の社会学, NHK ブックス, 1993, 19
- 41) 大橋照枝, 未婚の社会学, NHK ブックス, 1993, 22
- 42) 総務庁統計局, 労働力調査年報 1997, 財団法人日本統計協会, 1998, 44~45
- 43) 総務庁統計局, 労働力調査年報 1981, 財団法人日本統計協会, 1992, 24~25
- 44) 総務庁統計局, 労働力調査年報 1974, 財団法人日本統計協会, 1975, 24~25
- 44) 厚生省, 厚生白書平成 10 年版, ぎょうせい, 1998, 51
- 46) 落合恵美子, 21世紀家族へ, 有斐閣, 1994, 22
- 47) 大橋照枝, 未婚の社会学, NHK ブックス, 1993, 99
- 48) 大橋照枝, 未婚の社会学, NHK ブックス, 1993, 100~101
- 49) 内閣総理大臣官房広報室, 男女共同参画社会に関する世論調査, 総理府, 1995, 32~33
- 50) 労働省女性局, 平成 9 年版働く女性の実情, 財団法人 21 世紀職業財団, 1998, 57
- 51) 柴野昌山, 麻生誠, 池田秀男, リーディングス日本の社会学 16 教育, 東京大学出版会, 1986, 73~86
- 52) 南博, 日本人の人間関係事典, 講談社, 1980, 412~413
- 53) 南博, 日本人の人間関係事典, 講談社, 1980, 375~383
- 54) 南博, 日本人の人間関係事典, 講談社, 1980, 377
- 55) 依田明, 小川括之, 現代のエスプリ NO, 115 母親, 1977, 5~9
- 56) 依田明, 小川括之, 現代のエスプリ NO, 115 母親, 1977, 12~13
- 57) 落合恵美子, 近代家族とフェミニズム, 勁草書房, 1989, 290
- 58) 落合恵美子, 近代家族とフェミニズム, 勁草書房, 1989, 90
- 59) 信田さよ子, 一卵性母娘な関係, 主婦の友社, 1997, 124~126
- 60) 信田さよ子, 一卵性母娘な関係, 主婦の友社, 1997, 146~147
- 61) 信田さよ子, 一卵性母娘な関係, 主婦の友社, 1997, 87~91
- 62) 信田さよ子, 一卵性母娘な関係, 主婦の友社, 1997, 86
- 63) 信田さよ子, 一卵性母娘な関係, 主婦の友社, 1997, 80~81
- 64) 信田さよ子, 一卵性母娘な関係, 主婦の友社, 1997, 94~138
- 65) 緒方明, ミキハウス症候群, 宝島社, 1993, 58~60
- 66) 緒方明, ミキハウス症候群, 宝島社, 1993, 35~39
- 67) 緒方明, ミキハウス症候群, 宝島社, 1993, 44~45
- 68) 落合恵美子, 近代家族とフェミニズム, 勁草書房, 1989, 292
- 69) 落合恵美子, 近代家族とフェミニズム, 勁草書房, 1989, 302
- 70) 野村一夫, 社会学感覚, 文化書房博文社, 1992, 350